地図の図取りは、どの範囲を入れるかによって、図全体の持つ意味が違ってきます。「オーストラリア・ニュージーランド」では、単にこの地域を拡大してみせるだけではなく、インドネシアの一部や東ティモールも図取りに入れたため、オーストラリアが近年結びつきを強めているアジアとの「距離的な近さ」がわかる地図になっています。また、同じオセアニア州の島々、パプアニューギニア、ソロモン諸島、ニューカレドニアとの位置関係もみることができます。

記載要素では、「赤道をはさんで反対側に置いた同緯度・同経度・同縮尺の日本」から、オーストラリアが日本のほぼ真南にあること、南東部の人口集中地域は、赤道をはさんで日本と同じような位置にあること、などがわかります。そのほか、日本の約20倍の広さをもつオーストラリアの国土を実感するために、国内には独立時間帯もふくめて三つの等時帯があること、さらにわかりやすい例として、大陸を横断する「トランスコンティネンタル鉄道」の列車が、シドニーを出発してから各地に到着する時刻（所要時間）を示しています。

オーストラリアは、広大な面積の大部分を占める内陸部が砂漠や乾燥した草原で、耕作には不向きな人口密度が低い地域が広がっています。そのようすは、①図の「土地利用と植生」の色分けからも示されていますが、さらに中学生がイメージしやすいよう、②「オーストラリアの鳥かん図」を入れています。鳥瞰図では、山脈で沿海部と隔てられたグレートアーテジアン（大鑽井）盆地や、中央部の砂漠のようすが描かれており、水を得にくい地域での牧羊の工夫（掘り抜き井戸）や、内陸の産出地から沿岸部の輸出港まで、長距離輸送される鉱産資源のようすを読み取ることができます。鳥瞰図は写真とは異なり、見る人にとくに伝えたい要素を強調して、臨場感のある絵図を描ける長所があります。ここでは、①図（地図）とほぼ同じ向きで国土を俯瞰することができ、オーストラリアの特徴を端的に示した図になっています。

（帝国書院編集部）